

『愚秘抄』諸本研究の諸問題

——現状と課題をめぐって——

館野文昭

要旨

『鶉鷺系歌学書』と呼ばれる歌学書群（『愚見抄』『三五記』『愚秘抄』『桐火桶』）のうち、最も要検討課題の残る書が『愚秘抄』である。その諸本の問題についても、いちおうの通説的な系統分類は存在するも、様々な問題を孕んでいる。本稿ではまず『愚秘抄』諸本に関する先行研究を紹介し、どのような問題点を孕んでいるかを検討することにより、『愚秘抄』諸本研究の現状と課題について確認した。その結果、現在一般的に行われている系統分類は、十分な検証を経ずに、通説であるかのように認識されるようになってしまっていることが明らかになった。今後求められる作業としては、改めて諸本整理を行って、従来の説の妥当性を再検証することであろう。

続いて本稿ではその検証の第一歩として、未検証のまま現在の『愚秘抄』研究の通説となってしまうている、『愚見抄』粉本説と一巻本先行説について、具体的に本文に即して再検討を行った。その結果、『愚秘抄』にとって『愚見抄』は「粉本」というより「重要な参考資料の一つ」くらいに考えるべきであることを示し得た。また、原撰一巻本と原撰二巻本とは同一テキストの異本関係にあるのではなく、同一主体によって別個に製作されたテキストとみるのが良いであろうと想定するに至った。

一、鶺鴒系歌学書の研究状況と『愚秘抄』

鎌倉期に成立したと想定される「鶺鴒系歌学書」（「鶺鴒系歌論」「鶺鴒系偽書」とも）と呼ばれる歌学書群がある。『愚見抄』『愚秘抄』『三五記』『桐火桶』の定家仮託四書がそれで、互いに密接に関わり合いながら作成されたと考えられる^{（1）}。定家真作の歌学書として受容され、中世の文芸に大きな影響を与えたものであり、偽書でありながら文化史上無視し得ない存在となっている。

その重要性からか、研究の蓄積も厚い。諸書の真偽の問題を含めた生成の問題に関しては古くから諸氏により議論が積み重ねられており、その要点を整理したのが福田秀一氏「定家歌論書の真偽の問題」、『中世和歌史の研究』、一九七二）である。半世紀ほど前の論考であるが、当時の「鶺鴒系歌学書」研究上の問題について、簡要にまとめられており、これらの歌学書群について考えるに当たって、現在においても有用である。同論から、福田氏論文段階で、真偽の問題については「偽」とみるのが確定的である一方、諸書の生成については不明な点が多く見解が分かれていたことが知られる。

福田氏論文以後もこの歌学書群に関する研究は進展している。その中で最も重要な展開としては、冷泉家時雨亭文庫蔵本が紹介され、島津忠夫氏の解題が付されて影印が刊行された、ということが挙げられよう。『中世歌学集 書目集』（冷泉家時雨亭叢書第四十巻、一九九五）がこれであり、同書には、『愚見抄』『三五記』『桐火桶』『愚秘抄』の影印・解題が収められている。そのうち、『愚秘抄』を除く三書は、冷泉家第二代当主である為秀筆本そのもの、またはその透写本・転写本であることが解題において示され、この三書を為秀が書写していたことが確定的になった。

その後、同書において解題を執筆した島津氏は、冷泉家本の出現を承けて「鶉鷺系歌学書の成立と展開」(島津忠夫著作集 第八巻 和歌史) (二〇〇五)、初出は一九九七年角川書店刊の『和歌文学史の研究 和歌編』を發表し、これが「鶉鷺系歌学書」に関する現在の研究水準を示すものとなっている。最新の専門辞典である『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、二〇一三)も、この島津氏の論を承けて諸書の項目の記述がなされている。

右に述べた福田氏論文と島津氏論文、『和歌文学大辞典』の各項目の記述とを併せて考えると、諸書の生成については、以下のような過程がいちおうの通説となっているようである。

・歌道家の対立に関連して、冷泉家内部(阿仏尼・為相あたり)で『愚見抄』『三五記(上)』『桐火桶』が創られた。

・生成の初期段階から為実(二条家庶子・為氏男。関東にあり、為相と関わりがあった)經由で他流(二条家庶流・為実流)に伝わり、内容の改変などが行われ、諸本が成立。『愚秘抄』(一冊本)、『三五記(下)』がここで成立。『愚秘抄』は『愚見抄』『三五記(下)』は『和歌密書』を粉本として成立。

このように、『愚見抄』『三五記』『桐火桶』の三書の成立に関しては、冷泉家が主体的に関わっていたらしいことが明らかに一方、『愚秘抄』の生成については不明な点が多い。二条家庶流の為実がはじめから関与していたとされる(『和歌文学大辞典』等)と説明されることもあるけれども、具体的なこととはほぼわかっていない。四書のうち、最も課題の多い書が『愚秘抄』であると言えよう。生成の問題をはじめとする諸問題は、諸本を整理して、奥書や形態、その内容の異同の調査を経て考える必要がある。

以下、本稿では『愚秘抄』諸本研究——延いては鶉鷺系歌学書全体の研究——を進展させるための前提として、諸本をめぐる研究の現状と課題について考えてみたい。

猶、鶺鴒系歌字書四書のうち、『愚見抄』と『桐火桶』は伝本研究が進展しているのに対し、⁽²⁾『愚秘抄』と『三五記』の両書の伝本研究は比較的立ち後れている。『三五記』については一巻本(原型)と二巻本とに大別される、ということとは明らかになっているが、猶詳細な伝本研究が為されるべき余地があるように思われる。『愚秘抄』については、本稿でこれから述べるとおり、いちおう通説的な系統分類は存在するが、やはり後述するように様々な問題を孕んでいる。また、「鶺鴒末」と称される『愚秘抄』諸本は、「鶺鴒末」と称される『三五記』諸本の生成と連動して展開していったものと推測される。『愚秘抄』諸本の問題は、即ち『三五記』諸本の問題に直結するものと考えられる。⁽³⁾

二、『愚秘抄』諸本の分類【1】「一巻本／二巻本」という分類、並びに一巻本先行説

『愚秘抄』は、「諸本によって記事の異同が大きい」(『和歌文学大辞典』)と言われるテキストである。そうしたテキストを使用するにあたっては、まずは諸本を調査し、系統分類を行い、それぞれの系統がどのようなものであるか、というのを突き止める、という作業が必要となる。当然、『愚秘抄』諸本についても、そのような追究はなされている。以下、先学の諸本をめぐる考察を年代順に紹介するとともに、その問題点について検討してみたい。

①『日本歌学大系第四巻』「愚秘抄」解題(初刊、文明社、一九四二)

『愚秘抄』諸本の分類が最初に行われたのは、『日本歌学大系第四巻』所収の解題においてである。同解題は、『愚秘抄』は一般的には上下二巻(本末)に分かれるものであるということ述べた上で、「上下に分れない一冊本」もあり、「内容も著しい相違がある」と述べる。流布本である二冊本(群書類従本や板本)と対校出来るように、という意

図で「本大系には一冊本を収録した」とする。一巻本（一冊本）と二巻本（二冊本）の関係については、以下のよう
に述べる。

本書は異本の甚だしいものであるが、大別すれば一巻本と二巻本となり、一巻本の方が原形に近からうと思ふ。
而して二巻本の方が分量も極めて多くなり、上下各巻の終のあたりに追加せられた条が特に多い。二巻本系統に
於ても群書類従本と木板本とに著しい相違があり、又諸写本は夫々甚だしい相違がある。

ここにおいて、諸本は二系統に分類されており、一巻本（歌学大系本）の方が原型に近いとされる（以下本稿では
この考え方を「一巻本先行説」と呼ぶ）。ただし、その具体的根拠は示されていない。

猶、同解題において、系統の呼称について、「一冊本／二冊本」とする場合と、「一巻本／二巻本」とする場合と、
揺れが見られるが、その指示するところは同一である。二巻本諸本を見るに、内容は上下に分かれるものでも書物と
しては一冊の形式をとる場合もあるため、本稿では原則として「一巻本／二巻本」と呼ぶこととした。

②手崎政男氏『有心』（八雲書林、一九四四）

手崎政男氏『有心』（八雲書林、一九四四、後に『有心と幽玄』（笠間書院、一九八五）に採録）は、執筆が昭和一
五（一九四〇）年の夏であり、一九四二年初刊の『日本歌学大系第四巻』を参照出来ておらず、群書類従本と版本の
みを資料として利用している。前節で掲げた福田氏論において、既に乗り越えられた論として扱われ、現在に至るま
で顧みられることの少ない論である。『愚秘抄』諸本の考察にそのまま適用することの出来ない論であることは確かだ
る。ただし、こと諸本の問題を考えるにあたっては些か示唆に富むものであり、ここに簡略に紹介しておく。

同論考はまず、群書類従本・版本の両本の本文異同を問題にする。手崎氏は両本間に顕著な異同が見られる箇所二

○箇所を挙げ、その異同の甚だしいことを述べる。そして、「本文の著しい異同にもかかわらず、その趣旨が大体不変である」ということを指摘し、「すなわち、この両本は互いに異本的関係に立つのではなくして、原本的關係にあるものだということが、換言すれば、同一の主体——全くの同一人かどうかは問題としても——によって作りかえられたものだということが考えられる」と結論付ける。

そして、『愚見抄』と類従本『愚秘抄』とを比較し、『愚見抄』が『愚秘抄』の粉本として利用されたことを説く（以下、本稿ではこれを『愚見抄』粉本説と呼ぶこととする）。この『愚見抄』粉本説は論者も多く、前節で述べたように（⁴）現在でも通説となっているものである。手崎氏は、『愚見抄』を二項目に分け、その内十七項目において『愚秘抄』に対応本文が見られること、その共通点の顕著であることを指摘している。そして、版本と類従本の異同箇所が、『愚見抄』と『愚秘抄』の非共通部分に多いことから、『愚見抄』粉本説を想定する。つまり、同一主体が『愚見抄』を基盤として、版本本文・類従本文を作り出した、ということである。図式化すれば以下の通り。

版本（二卷本）

→（増補改編。類従本と同一主体の所為）

『愚見抄』

←（増補改編。版本と同一主体の所為）

類従本（二卷本）

手崎氏論は『愚見抄』全体を『愚秘抄』と比較しており、後に同様な手続きから『愚見抄』粉本説を主張する田中裕氏の論（④）において説明する）よりも説得力を有するものとなっている。しかしながら、改めて引用された『愚見抄』と『愚秘抄』本文とをみると、明白な本文の借用関係にあると断じて良ささうもの、あるいはその可能性が

高そうなものは、二二項目中六項目程度であり、残り⁽⁵⁾は趣旨が同じ、共通する語彙が含まれる、といった程度である。『愚見抄』の影響は認めて良さそうではあるが、「粉本」という程のものであるかは不明である（この問題は第四・五節で考察する）。また、利用されているのがいずれも二巻本に属する類従本と版本であるため、①『日本歌学大系』「解題」において示された一巻本先行説の妥当性を考える手掛かりとはなり得ていない。

③八島長寿氏「鶺鴒の書形成考」〔横浜国立大学学芸学部〕、一九六五)

①『日本歌学大系』「解題」で提示された一巻本先行説を、根拠をもって説いたのが、八島長寿氏「鶺鴒の書形成考」〔横浜国立大学学芸学部〕、一九六五)と田中裕氏「定家仮託書(下)―鶺鴒末の原型―」〔中世文学論研究〕塙書房、一九六九)である。ともに『日本歌学大系』「解題」での二系統分類の継承的發展というべき論考である。この両論について、③④で紹介したい。猶、両氏論中には「一冊本／二冊本」の呼称が使われているため、両氏論考を引用する場合に限って、この呼称を使用する。

まずは八島氏の論からみてゆきたい。

二巻本の中でも群書類従と版本との間に異同の多いことは『日本歌学大系』「解題」でも示されていた通りであるが、八島氏は所謂三箇秘伝の一である「をがたまの木」の箇所について、一巻本・版本(二巻本)・群書類従本(二巻本)の三者本文を比較して、一巻本↓版本(二巻本)↓群書類従本(二巻本)という順序で成立したと主張する。

また八島氏は、『愚見抄』と『愚秘抄』の関係についても述べている。『愚秘抄』が『愚見抄』の影響を受けているものとする考え方は八島氏論以前から存在したが、一巻本よりも版本(二巻本)の方が『愚見抄』からの「借用の量が遙かに多くなっている」ことに着目し、一巻本を増補する際に『愚見抄』が利用されたと考えている。一方で一巻

本でも『愚見抄』の影響はあるものの、その程度は小さく、僅かに資料として用いているのみであるとする。『愚見抄』粉本説とは異なる立場を示しているのである。

その他、版本から群書類従本への増補に当たっては、版本だけではなく、一巻本も併用していたという指摘もある。図式化すると次の通り。

（僅かに影響）

『愚見抄』 ↓ 一巻本

←（増補改編） ↑ 『愚見抄』を利用

版本（二巻本）

←（増補改編） ↑ 一巻本も利用

群書類従本（二巻本）

ただし、この八島氏論により一巻本先行説が実証された訳ではない。八島氏が各系統の成立順序の考察の資料として利用した「をがたまの木」の箇所本文について、いま改めて一巻本・版本・類従本系統の三者の本文を掲げたい（群書類従本に関しては同系統の古写本である冷泉家本の影印が刊行されているのでそちらを使用）。

（一巻本）「当家の相伝には交野の御狩に鳥をつけて奉る鳥柴と申す木をがたまの木といふ也」

（版本）「当家の口伝に、をがたまの木と申は、かた野の御狩りのとき鳥を付てたてまつる鳥柴といふ木なり。いつのとしやらん丹後の国へ下向し侍しとき、ある山路をすぐるとて見しかば、紅葉のことに色めきて侍しを、草かりて立りし老翁に、「あのみぢは何の木ぞ」とひしかば、老翁こたえていはく「あれはをがたまの木と申也」とこたえしかば、やがて手折よせて見るに、交野の鳥柴なりき。本よりの口伝にあひ侍りしかば、それよりこと

に此義を重じて侍り」

(冷泉家本Ⅱ類従本系統) 「当家の口伝、おか玉の木と申は、片野の御狩の時鳥つけてたてまつる鳥柴と申木也。此事、亡父卿もつたへず、我と感得して侍儀なり。いつの年やらん丹後国へ下向し侍し時、ある山路を過るとて見しかく黄葉ばいのことに色めきて侍しを、草かりたちたりしを万堯まげに「彼紅葉ばいはは匂ほの木といふぞ」と心侍こころしかば、老翁らうじゆこたへていはく、「あれはおか玉の木と申也」とこたへしかば、やがて手折よせて見るに、片野の鳥柴にて侍りき。もとよりの口伝ならねど、金吾の説にふるき詞のかやうに難儀有て一偏にいひさだめぬ事をば、田夫にあひてあきらめよと侍き。さるあいだ此儀を家の説にさだめ侍ぬ」

この三者比較から八島氏は、一卷本は「相伝の説を記しただけ」、版本は「その口伝を自分の体験に訴えて確認」したものの、類従本は「自分の体験に更に金吾基俊の説を結びつけた上で、自ら家説を創建したという風にまで変形している」とし、「版本は一冊本の記述を素直に受け止めて、これに体験の記述を附加した形で、恐らく一冊本に基いて書かれているものである。類従本は板本の説を取り込んではいないが、従来相伝の説として扱って来ているものを自説の如く改めているのであって、板本を改竄しているものと見られる。これら三系統の成立順序をこれ以外に変えて考えて見ることはほとんど不可能であろう」と述べる。

確かにこの見解には一定の蓋然性は認められよう。ただし、これ以外の想定が不可能な訳ではない。類従本系統本文は「鳥柴」説を重代相伝の説ではなく定家が定めた説として扱っているが、定家以降の家説とするよりも俊成以前から代々継承されている御子左家相伝の説であるとした方が、説の権威性が高まると考えた結果、類従本系統の本文が版本系の本文に改められたとみることも可能である。また、版本系の本文のエッセンスだけを抽出して、一卷本の本文が成ったとも考えられよう。この部分の比較のみを以て、この三者の先後関係を確定させることは出来ない。各

系統の関係や『愚見抄』との影響関係等は、やはり他の部分もみた上で、全体的に判定する必要がある。

④田中裕氏「定家仮託書（下）―鶴本末の原型―」（『中世文学論研究』塙書房 一九六九、初出一九六七）

続いて、田中裕氏の論について見たい。

田中氏は、まず『愚秘抄』が先行する『愚見抄』を粉本として成ったものであると捉える（『愚見抄』粉本説）。先述の通りこの『愚見抄』粉本説は田中氏独自の主張という訳ではないが、一卷本系統について「この系統が最も原型に近く略本とは思はれないことの考証は別に期することとし」とした上で、「一冊本を手掛かりとしてその原型をかざひたい」として、一卷本『愚秘抄』本文と『愚見抄』本文とを比較検討し、『愚見抄』を『愚秘抄』の原型と認定している。

田中氏論は本文上の類似から『愚見抄』粉本説を導いている。まず同論が卷末部の類似として挙げる本文は以下の通りである。

愚秘抄「この条々大切の事どもなり。家の骨目とて亡父卿庭訓の侍りしにこそ。仍不可有他見物也。あなかしこ
〈。〉」

愚見抄「これ何となきやうなれども、道の骨目なるべし。人の目たつるまでのことはあらしなれども、家の明規とあふぎて家を出すべからず。あなかしこ。」

また、その他の箇所部分の類似は以下のように指摘される。該当箇所全文を引用する。

愚見抄の冒頭は「歌はいかにとあるべきものぞと尋ね侍りしかば、たゞ心の及ぶところに叶はむとすべしと宣ひしは」といふ亡父卿の言葉ではじまっているが、これは文形こそ異れ、愚秘抄が前記貫之の言葉ではじめたのと

比較されるし（※引用者注。一卷本愚秘抄の巻頭は「それ大和歌は人の心を種とすと貫之が書き侍るも、まことなるかなや…」として始まる）、自悟自証を説くその趣旨においても類似するのである。愚秘抄の方はこの後「そもそも歌の体一境に限らずして、その姿さまざまに相分れたり。されば、人のもとづき好むすぢぞ個々にしてさらに一ならず」と起して十体論に移つてゆくが、愚見抄の方も「凡そ歌のさま一方ならず。さるから初心の時むねと（詠むべき姿を）思ひ分ち侍るがゆゆしき重事にて侍るなり」（竜谷大学本の欠脱を和歌八部書本で補ふ）と起して、間に詞論を挿んではあるが十体論に進んでゆく点、論旨の構成・叙述の順序、文章ともに類似する。同様な類似は漢詩の説、実朝評、清輔・亡父卿など（愚秘抄前半部分）についても指摘され、これらを勘合すると前掲愚秘抄の巻末部と愚見抄のそれとの類似（特に「骨目」）も単なる空似としてあつかふことはできないであらう。

以上のように述べた後、愚見抄が古くより定家歌学書として重い扱いのされる権威ある歌学書として認識されていたことを説明し、「このやうに愚秘抄と愚見抄との間に本文の構成・内容・文章について直接の影響や借用が認められるとするならば、一冊本愚秘抄の現形はその首尾を併せて、おほよそ愚秘抄の原型つまり鶴末の形態を伝へるものとみて差支えないのではなからうか」と説く。そして「巻末部をはじめ」とする「幾つかの箇所について愚見抄との類似が目につく」と述べられる。

田中氏論において、右の引用部のほかに、『愚秘抄』と『愚見抄』との関係及び一卷本と二巻本の先後関係についての考証らしきものは見当たらないので、これをもつて田中氏は、『愚見抄』をもとに『愚秘抄』が製作され、かつ二巻本の方が原型であり二巻本に先行するものと認定しているものと思われる。

ただし、これで『愚秘抄』諸本の問題が決着したとは田中氏も考えてはいなかったようで、補注において次のよう

な見解も述べている。

たゞ一冊本愚秘抄が直接板本、類従本に展開したかどうかは疑問であり、むしろ一つの原型から派生した三系統に属するのではないかと臆測する（細部における三者間の影響関係は否定できないが）。詳しくはさらに考へてみなければならぬが、しかし一冊本が原型に最も近い状態を保持し、他が原型からそれぞれ展開、増補された形を示すことに異論はない。（田中氏著書四八六頁）

このように問題は残るものの、一巻本が二巻本に先行するということを確定的なものとして捉えているのは明らかである。

図式化すると左の通り。

『愚見抄』(『愚秘抄』の原型)

← (核として製作)

一巻本 (歌学大系本)

← (増補)

二巻本 (版本・群書類従本)

その後の『愚秘抄』諸本研究は、この田中氏の論考の影響下に展開することになる（現在の通説はこの田中氏論『愚見抄』粉本説十一巻本先行説）を継承するものとなっている。

ところが、実は田中氏の考察は、一巻本先行説は立証するには以下の二点において十分ではない。

まず、田中氏の一巻本先行説は『愚見抄』粉本説を前提とするが、その検討はもつと丁寧に行われなければならぬように思われる。例えば両者の本文に、全くの同文という箇所が多く存するのであれば、直接的影響関係の可能性

を想定することも可能かもしれないが、田中氏論に挙げられた本文の類似箇所は、明らかに別文である。単に、權威ある先行歌人の発言の引用から始まっているという構成や、「骨目」という同一の語彙が使われている、といった程度であり、長文に亘って同文が存在するということは指摘されていない。ここから直接的影響関係にあると断言するのは不可能である。これを言うためには、さらに具体的な本文の比較検討を必要とする。

田中氏論以前に『愚見抄』粉本説を具体的論拠をもって主張した論として、②に紹介した手崎政男氏『有心』がある。同論は先述の通り田中氏よりも具体的な本文の比較検討から『愚見抄』粉本説を打ち出しており注意されるものの、『愚見抄』粉本説が立証された訳ではないということは先述の通りである。田中氏以後では佐野典子氏「愚見抄・愚秘抄・三五記の交渉と自立—歌体論の異同を中心として—」（『国文目白』18、一九七九）が『愚見抄』粉本説を歌体論部分（主として共通歌に着目）から説明している。こちらも考察の対象となっている本文が限定的であり、「粉本」と言えるほどの影響関係にあるかは不明である。

もう一点、本文比較に使用されるのが一巻本のみであるという点には問題がある。仮に『愚見抄』を直接的に参照して『愚秘抄』がなったという前提を認めるにせよ、一巻本と二巻本との先後関係は、『愚見抄』・一巻本『愚秘抄』・二巻本『愚秘抄』の三者の本文を比較しなければ確定的に述べることは不可能な筈である。しかしながら、田中氏論では『愚見抄』と一巻本『愚秘抄』との本文比較のみから結論を出してしまっており、検証不十分であると言わざるを得ない。活字になっていないところで検証済みなのかもしれないが、学術的に一巻本先行説の妥当性を立証するためには、やはり論文上で検証される必要があるだろう。

このように、一巻本先行説は問題を生むものであることは明らかであるが、この問題点はその後の研究において十分に検証されていないようである。

その一方で、一巻本先行説は、後述する三輪正胤氏の四分類にも継承されおり、また比較的近年の論考でも、酒井茂幸氏『『愚見抄』伝本考』（『禁裏本と和歌御会』、新典社、二〇一四、初出は二〇〇二）など、一巻本を増補して二巻本が成ったことを前提とする論があり、いちおうの通説的地位を得ているようである。また、『和歌文学大辞典』の記述等を見るに、『愚見抄』粉本説も通説となつていようである。この両説に関して、十分な検証がないまま発展的に継承され、通説的に扱われている現状はやはり問題であろう。今後『愚秘抄』諸本の問題を考えるに当たつて、『愚見抄』・一巻本・二巻本の三者の比較から、『愚見抄』粉本説と一巻本先行説がどこまでの妥当性を持つものなのかということを検証する必要があるように思われる。

三、『愚秘抄』諸本の分類【2】現在通説的地位にある四分類について

「一巻本／二巻本」の二分類以後の『愚秘抄』諸本の系統分類として、三輪正胤氏による四分類が挙げられる。同氏は『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八六）において「愚秘抄」項を担当した同氏は、【諸本】についての解説としてのような分類を提示している。

四種に大別される。第一は、『愚見抄』を核にして、これに新見・反論等を加え一巻本の形にまとめたもので、静嘉堂文庫本他がある。第二は、この一巻本を改変して、これを上巻とし、下巻に歌人伝説・古今三箇秘伝等を説く二巻本形式のもので、東北大学本がそれである。この二巻本の下巻のあとに「私此奥口伝所々抄出」と題して、勅撰撰集の故実や和歌会席の作法等を記すものが第三で、高野山大学本他や版本がそれである。第四は、この第三のものを更に全般にわたつて改変したもので、伝本としては最も多く存し、群書類従にも収められている。こ

れら伝本は第一のものから順次第四のものへと改変されていったのではなく、『三五記』と複雑にからみ合って成立したものと考えられる。

一読してわかるとおり、前節で述べた二分類を否定するものではなく、継承・発展するものとなっている。傍線部のような留保を述べつつも、一巻本を原型に近いものと捉え、また『愚見抄』粉本説も継承されているようである。

この四分類は、鶉鷺系歌学書の現在の研究水準を示す島津忠夫氏「鶉鷺系歌学書の成立と展開」(前掲)においても、次のように整理した上で分類基準として提示されている。

第一類 (一巻本)

静嘉堂文庫本

第二類 (二巻本。上巻は一巻本を改変。下巻は歌人伝説・古今三箇秘伝)

東北大学本

第三類 (二巻本。下巻のあとに「私此奥口伝所々抄出」と題して、勅撰集の故実や和歌会席の作法等を記すもの)

高野山大学本・江戸時代初期版本

第四類 (二巻本。更に全般にわたって改変したもの)

群書類従本

一巻本を第一類とし、二巻本系統をさらに三類に分けて第二・四類とした形である。この島津氏論に加え、『和歌文学大辞典』の「愚秘抄」項、また最近発表された長谷川千尋氏「下冷泉持為『古今和歌集抄』と冷泉家の歌学」(『国語国文』88-2、二〇一九年二月)もこの分類を『愚秘抄』の伝本分類として掲げている。現在の研究水準において、この三輪氏分類が『愚秘抄』諸本の系統分類として定説的位置にあるとみて良いだろう。

しかしながら、この三輪氏の分類も様々な未解決の問題を含むものである。

そもそもこの分類は前節で紹介した一卷先行説を前提としているが、その一卷本先行説は先述の通り未解決の問題があり、確定的とは言えない説である。もしこの説が崩れるとなれば、この四分類も再検討の必要が生じる。

そして、何故このような分類になるのか、という具体的な根拠を記した論文が未発表であり、この分類の妥当性について追試を行うことが現在のところ不可能であるという点も問題である。現在、この分類を提唱した三輪氏の手になる『愚秘抄』四分類に関する文章は『日本古典文学大辞典』『愚秘抄』のみである。恐らく三輪氏は現在において最も『愚秘抄』諸本の問題について考察した研究者であり、資料博搜と諸本の構成や本文内容の比較を行った結果として前述の四分類を導き出しているものと思われる、右の分類は一定の信頼性は担保されてはいる。けれども、ある説が通説化するためには、結論だけではなくその結論に至る過程について、一定の紙幅を割き具体的に本文なども引用して論じられた上で、他の研究者の追試によりその妥当性が追認される、というプロセスが必要である。三輪氏四分類説が無批判に受け入れられることで定説化してしまっているという状況は何よりの問題であると言えよう。

さらに、それぞれの類がどのような性質を持つものであるかという具体的な説明が無いため利用しづらい、という問題もある。『愚秘抄』のような伝本によって内容の出入りが大きい書目の諸本分類において求められるものは、「どのような時にどの本を利用したら良いか」ということを考えるための手助けとなるような、各類の生成・享受・伝来の場の解明である。こうしたことを明らかにする専論が発表されていない現状においては、この分類を十分に有効活用することは出来ない。

ところで、『日本古典文学大辞典』の刊行以後、三輪氏は『愚秘抄』の形（『歌学秘伝史の研究』、風間書房、二〇一七、初出は一九九五）という『愚秘抄』を主題として取り扱った論考を公表している。同論は東北大学図書館本を

中心的に取り上げて論じたものであるが、「一 東北大学図書館本(秋田三春家旧蔵)『愚秘抄』と諸本との関係」(『歌学秘伝史の研究』三六―四一頁)と題する節を設け、『愚秘抄』諸本についても言及する。ところが、前節で取り上げた四分類については何も触れるところが無いのである。

そこで記述される主な内容は、『愚秘抄』諸本の中に、奥書から「正和三年本系統」と呼び得る一群があり、東北大学図書館本がそこに属するということである。「正和三年本系統」は「歌学大系本の内容に類似して」おり、「大筋では、版本系の文意を持つ」と指摘される。そしてこの系統は二類に分けられ、各類の伝本として

第一類…東北大学図書館本、彰考館文庫本、広島市立浅野図書館本、内閣文庫本

第二類…高野山大学図書館本

が挙げられている。それから、蓬左文庫蔵『鵜本 鷲末』も正和三年本系統であるともいう。

ここで記述されるのは諸本全体の分類ではなく、「正和三年本系統」という一群についての論述ではあるものの、「形態の面から言えば、版本系は、正和三年以降の一つの形を、群書類従本系は、それ以前の一つの形を伝えていることになる」というようなことも述べられている。つまり、版本系・群書類従本系は正和三年本系統とは別系統であるという認識が見て取れる訳であるが、高野山大学本と版本とをともに第三類に分類する三輪氏四分類とはどう対応するか、明確でない。

三輪正胤氏は『日本古典文学大辞典』「愚秘抄」項目執筆後も『愚秘抄』諸本の調査研究を進めていたであろうと思われる。その三輪氏が辞典項目執筆後に発表した論文において、三輪氏四分類とやや異なる『愚秘抄』諸本論が展開されている。この事実を勘案せずに三輪氏四分類を通説的系統分類として利用してしまっているという問題性は、『愚秘抄』諸本を考える上で注意しておきたい。

四、『愚見抄』粉本説と一巻本先行説の再検討【1】歌体論の本文比較から

ここまで『愚秘抄』諸本研究の現状と問題点を概観してきた。結論としては、第二節でみた一巻本先行説にせよ、第三節でみた四分類説にせよ、十分な検証を経ずして通説のように扱われている、という現状は問題であろうということである。今後求められる作業としては、改めて諸本整理を行って、従来の説（「一巻本／二巻本」という分類基準・一巻本先行説・三輪氏四分類説・『愚見抄』粉本説）の妥当性を確認することであろう。⁽⁶⁾しかしながら、このような問題の多い研究現状がもたらされる原因は、『愚秘抄』諸本の様態が複雑で混迷を極めていることによるだろう。そうした中、いきなり諸本の全様態の解明を目指すというのは困難である。まずは限定的ではあっても、検討可能な問題を検討し、その蓄積により全体を明らかにしてゆくより外は無いと思われる。⁽⁷⁾

本稿で、差し当たって検討したいのは、田中裕氏以降の通説となっている『愚見抄』粉本説と一巻本先行説である。現在の通説は田中裕氏の説く両説を基準にして発展したのものとなっているが、その基準点の確かさの検証が不十分なものとなっていることは、確認した通りである。そこで本節と次節において、『愚見抄』一巻本『愚秘抄』二巻本『愚秘抄』の三者の本文比較から、この両説がどこまで確定的であるかを考察してみたい。

第二節でみたように、田中裕氏が引いた『愚見抄』本文と『愚秘抄』本文とは、「類似」に留まり、直接的本文の影響関係を認められるものではなかった。田中氏は、巻末部と巻首部分の本文を挙げて類似を指摘しているが、その他には、①十体論、②漢詩の説、③実朝評、④清輔・亡父卿といった箇所、類似があるという。これらの箇所の「類似」とは、どのようなレヴェルのものなのだろうか。改めて確認してみたい。

先ず見てみたいのが、①十体論である。厳密に言えば、所定家十体を軸とする歌体についての解説が為されている部分であり、十体の他の歌体に関する記述も見えるので「歌体論」と呼ぶべき箇所である。『日本歌学大系』の頁数で示せば、『愚見抄』三五五頁一〇行目〜三五七頁一一行目まで、『愚秘抄』二九一頁八行目〜二九四頁五行目までとなり、『愚見抄』と『愚秘抄』との類似部分のうち、最も大きなシェアを占めるのがこの歌体論である。

『愚見抄』の本文を先ず示し、一巻本及び二巻本『愚秘抄』本文との「類似」がどのようなものなのか、具体的に本文に即して確認・検討したい。

猶、『愚見抄』は影印の備わる古写善本である冷泉家時雨亭文庫本に拠り、一巻本『愚秘抄』は日本歌学大系本を用いる。二巻本『愚秘抄』は諸本によりかなりの異同があることは前節までに確認した先行研究からも明らかであり、特定の一本に代表させるのは些か危険ではあるけれども、二巻本間の異同についてはまた今後調査が進んだ後に改めて検討することとして、一先ず暫定的に、伝本が比較的多い第四類に属し、影印が刊行され利用もしやすく、かつ古写善本と思しき冷泉家時雨亭文庫本（群書類従はほぼ同じ）を二巻本の本文として利用する。

① I 冒頭部

『愚見抄』の歌体論冒頭部は次のように始まる。

抑哥のすがたにあまたの風姿あり。十体とてふるくも家々にたてをきて侍るにや。又、詩十体とても侍り。詩哥の十体ともに相違なきにや。三五記にくはしくわかちあてゝ侍り。十体と申は、幽玄体・長高体・有心体・事可然体・麗体・濃体・有一節体・面白体・見様体・拉鬼体、これ也。よろしくこれはふるくしをきて侍れば、見知せよ。此外の体は又、可存知事あまた侍り。いはゆる写古体・景曲体・哀体・存直体・行雲廻雪体・理世撫民体

と申事あり。

まず、いわゆる定家十体の名称を列挙し、「此外の体」ということで、写古体・景曲体・哀体・存直体・行雲廻雪体・理世撫民体を挙げている。⁽⁹⁾ 『愚秘抄』にも歌体の名称を列挙した箇所は存する。

(一 卷本)

先十体とて古くもあまた選びおけり。此十体を本実として、猶風体あまじはるべし。所謂、

- 遠白体 秀逸体 物哀体 強力体 存直体
- 一興体 拔群体 花麗体 行雲体 廻雪体
- 理世体 撫民体 至極体 松体 竹体 高山
- 体 澄海体 不明体

かくの如くの姿十八あるべし。いかならむ歌はこれ／＼と定め申さん事は、ゆゝしき重事なるべし。されば故人も分明に名を付け定むる事難しと思へり。愚老も僅にさやらんとばかり覚えながら、確かにそれとは申しがたくこそ侍れ。但此十八体を先の十体よせて心得べきにや。もしあふやらむ。

- 幽玄体（行雲体 廻雪体） 長高体（高山体

(二 卷本)

先十体とてふるくもさだめ置いて侍り。彼十体を本基として、猶風体あまたまじはるべきにや。いはゆる十八体なり。その体といふは、

- 遠白 秀逸 物哀 強力 存直 一興 拔群
- 花麗 行雲 廻雪 理世 撫民 至極 松体
- 竹体 高山 澄海 不明

これらの姿なるべし。いかなる哥こそ、是／＼と定申さむことは、ゆゝしき重事にて侍り。されば古人も分明に名をつくる事をばかたしとのみ思けるにや。其とちめと書さだめたるふしも残り侍らず。愚老もわづかにさやらんとばかりはたどりえ侍とも、又たしかにそれ／＼と申さむとし侍れば、迷惑して、筆のみさしをかれ侍り。たゞし、此十八体をも

遠白体 有心体 物哀体 不明体 理世体

撫民体 麗体 存直体 花麗体 事可然体

秀逸体 抜群体 面白体 一興体 鬼拉

体 強力体

至極体 松体 竹体 澄海体 此四はよせがたし。

相伝云、此四をば十体に皆わたして可心得也云々。

十体にみなわたるといふは、例へば何れの姿をも一

首にさしはさめる様に見えん歌なるべし。

との十体によせあはせて位品をたて侍るべし。若あふべきやらん。

幽玄 行雲 廻雪 長高 高山 遠白 有心

物哀 不明 理世 撫民 麗 存直 花麗

事可然 秀逸 抜群 面白 一興 拉鬼 強

力

至極 一興 松体 竹体 澄海体

此四は更によせがたくこそ。相伝云、此四体をば十

体に皆わたして意得べき也云々。十体に皆わたして

と云は、いづれの体とも一体を得ざらん哥の、しか

もよろづの姿を存ぜらんを、此四体の哥とは申べき

にや。

一卷本・二巻本ともに、『愚秘抄』は、十八体という十体とは別の歌体を列挙して、さらに、十体との対応関係を示す。まず、歌体名の列挙から始める、という点、『愚見抄』と「類似」していると見える。但し、本文的には全くの別文である。『愚見抄』にも、存直体と麗体、行雲・廻雪体と幽玄体、物哀体及び理世・撫民体と有心体との対応関係は指摘される。けれども右に引用した『愚秘抄』当該部の記述内容が、『愚見抄』の直接的影響下にあるかどうかは不明である。一見して分かる通り、『愚見抄』で言及される歌体は、『愚秘抄』のいう十八体と必ずしも対応していない。一方、

他の鶉鷺系歌字書にも目を向けてみると、『三五記 上』は『愚秘抄』の十八体すべてを十体の下位分類として掲げている。『愚秘抄』が十体に「よせがた」とする四体も『三五記 上』では十体に寄せているという異同はあるものの、『愚見抄』よりも『愚秘抄』に近い。本稿の冒頭で確認したとおり、『三五記 上』は冷泉家内部製作されたものと見られている。そして『愚秘抄』は冷泉家で製作された諸書の影響下に家外（為実周辺）において製作されたものとみられる。『三五記 上』と『愚秘抄』の先後関係は慎重を期す必要があるけれども、前者が後者に先行するものであるならば、後者の引用部の記述は、前者の直接的影響下にあるものとみて良いだろう。即ち、『愚秘抄』引用部分は『愚見抄』よりも『三五記 上』の影響が強いのではないかと思われるのである。要するに、ここからは『愚見抄』粉本説は導くことは出来ない。

*

さて、『愚見抄』は、前引の部分に続けて、写古体、存直体、行雲廻雪体、景曲体、理世撫民体、物哀体に関する具体的記述が続く。以下も同様に『愚見抄』の本文を基準に、一卷本『愚秘抄』、二巻本『愚秘抄』の対応関連箇所を併せて掲げ、その比較からどのようなことが言えるのかを考えて見たい。

① II 写古体

(愚見抄)

身にさむく秋のさよかぜ吹なへにふりにし人のゆめにみえつゝ

これぞ写古体と申ぬべき物さびしく心うるはしき哥さま也。亡父のことにうちやまれし哥也。

(一巻本)

写古体といふは存直の歌の中に、詞づかひ古めきはてゝ、近來の人のよめるよとも見えぬ歌の様によめらんに、心たしかに、しかもあはれふかくそへらんだぐひを申すべきにや。所詮古体といはるゝ姿にて侍るべし。

身に寒く秋のさ夜風吹くなべにふりにし人の夢に見えつゝ

此歌によみにせたらむや写古体にかなひ侍らん。此歌は人丸の歌の中に随分殊勝の事となん亡父卿も申しおき侍りし歌なり。又

こめやとは思ひながらも日ぐらしのなく夕暮はたちまたれつゝ

是ぞ歌の本に成りぬべきたぐひとわづかにおぼえ侍る。

(二巻本)

写古体は、存直の哥の中に、詞づかひふるめきはてゝ、近來の哥とも更に見えぬが、心たしかにさるから物の哀うかひそへたるたぐひを申べし。詮ずる所、古風をいふべき姿にて侍にや。此体よまるべきなり。ふるめかしき哥はいかにも見さめせでよろしき物なり。

身にさむく秋のさよ風吹なへにふりにしまゝの夢に見えつゝ

是体によみにせたらん哥ぞ、写古とは申ぬべき。此哥は、人丸の哥の中に随分殊勝の事と、亡父卿申され侍りにこそ。

こめやとおもふものから日ぐらしの鳴夕暮はたちまたれつゝ

是も、哥の本に成ぬべき類とおぼえ侍るとおしへをかれき。

この箇所に関しては、「身にさむく」歌を亡父が高く評価していたという内容的共通項があり、この点に影響関係は認めて良いだろう。ただし、『愚見抄』が当該歌を写古体の「歌さま」を示す歌とするのに対し、『愚秘抄』では当該歌は「古体」の歌であり、この体に似せて詠むのが写古体であるとする。説明方法の違いが見られ、『愚見抄』の直接的影響かどうかは判断できない。この箇所の比較から言えるのは、『愚見抄』と『愚秘抄』とは無関係ではなさそうだ」といった程度であろう。

① Ⅲ 存直体

（愚見抄）

存直体と申は、たゞ十体の中の麗体にて侍べきにや。されどもいさゝか意得わくべし。麗体ながらも平懐にてけはべる方なく、ありのまゝならん哥を存直体とは申べし。

この箇所に関しては、『愚秘抄』は、存直体を十八体の一体として麗体との対応は示すも、一巻本・二巻本とも、対応する記述は見えない。ここからは『愚見抄』の『愚秘抄』への直接的影響を判断することは出来ない。

① IV 行雲廻雪体

(愚見抄)

行雲廻雪と申は、幽玄の哥にとりての姿なり。幽玄の哥の中にわきて行雲廻雪といはるゝすがた侍り。心幽玄・詞幽玄とて兩種有べし。今の体は詞幽玄にて侍べきにや。文選高唐賦云、昔王遊高唐怠而、昼寢夢見一婦人。婦曰、妾巫山之女也。為高唐賦之客。且為朝雲、夕為行雨。朝々暮々、陽台之下、且朝視之如言。故為立廟、号曰朝雲。同洛神賦曰、河洛之神、名曰宓妃。髣髴兮若輕雲之蔽月、飄飄兮若流風之廻雪。肩如削成、腰如約素。是神女也。この景粧を心にかねたらん哥を申べきにや。

(二卷本)

所謂十体を物称として、いま各よする体は別号とすべし。行雲・廻雪といふは、幽玄本意也。行雲、廻雪は好妓の名也。是やさしく類なき女の姿を見る様ならん歌は幽玄体なるべし。

(二卷本)

幽玄体の哥とてあつめたる中に行雲廻雪の姿あるべし。幽玄は物名なり。行雲廻雪は別号なるべし。いはゆる行雲廻雪は、艶女の譬名也。其に取てもやさしくけだかくして薄雲の月を帯たらん心ちせん哥を行雲と申べし。又、やさしく気色ばみて、たゞならぬ、しかもこまやかにて飛雪のいたくつよからぬ風にまよひちる心地せん哥を、廻雪とは申侍べき。文選高唐賦云、晋先王遊高唐怠而、昼寢夢見一婦人。曰、妾巫山之女也。為高唐之客、且為朝雲、暮為行雨、朝々暮々、陽臺之下、且朝視之如其言。故為立廟、号曰朝雲。同洛神賦曰、河洛之神、名曰宓妃、髣髴兮若輕雲之蔽月、飄飄兮若流風之廻雪。肩如削成、腰如綯素云々、是神女也。此幽玄一体を申侍にて、餘の体をも是にならずらへて心得べきにや。…(後略)

この箇所に関しては、「行雲廻雪」が幽玄体に属する歌体であることを示し、さらに名称の由来を語るなど、内容的な類似が見られる。加えて、『愚見抄』と二巻本『愚秘抄』は、ともに典拠となる『文選』本文を引用しており（傍線部）、本文の借用・被借用の関係が疑われる。一巻本は傍線部がこれに相当するが、典拠の引用を省略し、一言で要約したような記述である。

一見して、本文的には一巻本よりも二巻本の方が『愚見抄』に近い。もし『愚秘抄』が『愚見抄』を粉本として成ったものであるとするならば、一巻本先行説には疑問が生じることになる。

猶、『三五記 上』の幽玄体の記述にも、『愚秘抄』本文に重なる記述がある。

行雲廻雪の両姿と申すも、たゞ幽玄のうちの余情なり。但、心あるべきにや。幽玄は物称、行雲廻雪は別名なるべし。所詮幽玄といはるゝ哥の中に、猶勝れて、薄雲の月をおほひたるよそほひ、飛雪の風にたゞよふけしきの心ちして、心詞の外におもかげうかびそへらむ歌を、行雲・廻雪の体と申すとぞ亡父卿申されし。

この波線部の本文と所引の二巻本の波線部本文との類似は明らかで有り、当該部の二巻本文の形成に『三五記 上』が無関係ではなさそうである。一方『三五記 上』には傍線部に相当する記述は無く、『愚見抄』の影響も否定は出来ない。つまり二巻本文は『愚見抄』『三五記 上』両者の影響を受けている可能性を指摘できるのである。

①V 景曲体

(愚見抄)

景曲体と申は、四時につけていづれまでも、其時興をよみうかべたらん哥ぞ、景曲体にはかなふべき。

(二巻本)

但、景曲体・写古体等、猶可存事とてかきとめられ侍りし。景曲をば見様体へのぞめ、写古をば存直体によせられ侍りし也。或人云、景曲をば面白体に属すべき也と申しき。すこし故なきにしもあらざるか。それにとりても心あるべし。見様体と面白体と多分同様なるべし。さればおもては見様を先として、底に面白体を兼ねたらん歌を景曲とは申すべきにこそ。

(二巻本)

但、景曲体・写古体を猶存すべき体とて申をかれし。「景曲体をば見様体に准じて心え、写古体を存直体によせて心得侍るべし」となり。それにとりても、景曲体は見様体の哥のしかも面白く興はある姿を底に結構したらん姿にて侍べきにや。

この箇所は、景曲体という歌体に関する記述である。『愚秘抄』は十体の一である「見様体」を起点に解説をしており（とは言え一巻本と二巻本とで本文異同が著しいが）、『愚見抄』とは説明の仕方に相違がある。ここから両者間の影響関係を議論することは出来ない。

①VI 理世撫民体

（愚見抄）

理世撫民体と申は、有心体の種類にて侍り。異朝堯舜、吾国延喜天曆のかしこき御めぐみにならずらふる姿成べし。この帝は一国の尊主、万人秀頂たり。有心体の哥は、和歌の本意至極とすべき体也。かるがゆへになぞらへなづくる成べし。有心体ながらも理世撫民体といはるべきさま也。是哥の灌頂なるによりてくはしくはのせず。又かきのせんとするに、更に其詞なし。まなびゆかばみづからさとり知べきにこそ。

（一巻本）

理世体、撫民体は有心体の本意也。例へば異域堯舜、吾朝延喜天曆のかしこき跡を思ふべし。是は万人の頂一天の主として、理世撫民の志浅からざりし御事也。有心体と云も歌の源性也。故に是にたとふるなるべし。

（二巻本）

さて、理世撫民は有心体の本意なり。いはゆる理世撫民と申は、物にたとへば、異域堯舜、吾朝延喜天曆のかしこき明時聖代のごとくなるべし。此両帝は何も一国の尊主、万民の秀順也。有心体は哥の本意至極とすべき体也。かるがゆへに彼理世撫民を有心体にたとふるなるべし。

この箇所は、①歌体論の中でも、明確に本文の借用関係が認められる部分である。『三五記 上』にも傍線部に類する本文は見られるが、⁽¹⁰⁾『愚見抄』ほどの本文の一致度は見られないので、この『愚秘抄』当該部分は『愚見抄』の影響下にあると考えて良さそうである。

一巻本・二巻本ともに『愚見抄』の影響が認められるが、より本文が近いのは二巻本の方である。ここからも、『愚

見抄』粉本説を前提とするならば、二巻本の方が原型に近いものであり、一巻本の本文はそれを変形・簡略化したもの、と考えるのが無理が無いように思われる。

① VII 物哀体

(愚見抄)

物哀体、これはことに好土ことにおもはへて侍べきにや。たゝのこりなくさこそとしづみきはまれる姿にて侍べし。すべて大事体也。有心体の哥の中にまゝあるにや。

あれわたる秋の庭こそあはれなれましてきえなん露の夕暮

しめをきていまやと思ふあき山のよもきかもとに松虫のなく

をさゝ原かぜまつ露の消やらでこの一ふしとおもひをくかな

これらにて侍り。愚老も、いかにしてかかやうによみにせんとのみ、あけくれはなやみ案ずれども、更になかなかたし。亡父卿の桐火桶の哥などの給しは、かゝるたぐひにぞ侍けん。

これについては、『愚秘抄』は、十八体の一として物哀体を位置付けはするものの、当該箇所に対応する記述は一巻本・二巻本ともに認められない。

*

以上、『愚見抄』と『愚秘抄』の歌体論の本文を並べて、考えられることを書き連ねてきた。まとめると、以下の二点に集約されよう。

・『愚見抄』は『愚秘抄』の本文生成に何らかの影響を与えていることは否定し得ない。ただし、『三五記 上』など

も同程度には影響を与えているようにも思われる。『愚秘抄』本文が『愚見抄』と全くの同文である箇所は必ずしも多くない。『愚秘抄』にとつての『愚見抄』が、「粉本」・「核」というほどの大きなものであつたのかは、検討の余地があるように思われる。

・一巻本よりも二巻本の本文の方が、『愚見抄』『三五記 上』の本文に近い傾向にある。⁽¹¹⁾『愚秘抄』本文形成に両書が直接的に参照されたのであれば、二巻本文の方が原型に近く、一巻本文はその内容を要約・編集したものであることになる。端的に言えば、定説的に扱われている『愚見抄』粉本説と一巻本先行説は、同時には成り立つのは困難である。

五、『愚見抄』粉本説と一巻本先行説の再検討【2】その他の箇所の本文比較から

前節では①歌体論部分の本文比較から想定されることを述べたが、それは他の箇所からも言えるのであろうか。同様に②漢詩の説、③実朝評、④清輔・亡父卿に関する記述についても具体的本文に即して考えて見たい。

②漢詩の説

(愚見抄)

つねによき詩を吟じて心をすますべき也。詩は心をたかくすます物にて侍から、

蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中

この詩をぞ、亡父卿は詠ぜられし。

故郷有母秋風涙、旅館無人暮雨魂

これ又すぐれたる事にて、心をうごかすたぐひ也。白氏文集に大要の巻あり。常に披見せよとぞ、古人も申ためる。

(一巻本)

さて、常によき詩を心にかけて詠吟せよ。心をたかくすます事、詩にすぎたる事なし。

蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中

此詩をぞ、先人常に高吟せられし。又、詩十体を見るべき也。凡歌十体もそれを模してえらび出せるにや。具平親王の草集せられ侍る十体殊に大切也。近代にも人々あまた草せられて侍るやらん。又、白氏文集の中に大要の巻侍り。それを披見すべしとぞ承りおきし。以言、「花時不居家」と云ふ題にて作り

(二巻本)

「つねにいみじき詩を心にかけて吟詠せよ、詩は心をたかくすます物なり」となん。

蘭省花時綿帳下、廬山雨夜草庵中

此詩をぞ、先人はつねに高吟せられし。又、詩の十体を相構て見るべき也。凡哥の十体も詩を模してえらび出せるにや。後中書王の抄集せられて侍る十体をぞ、諸儒一同に大切の事に申侍るめり。金吾詩十体も誠にありがたく見え侍り。又、白氏文集ならびに毛詩の要巻、常に披見して、やがて其六義の指南

たりし詩、殊に殊勝の事にや。為憲が「暮雨魂」といへる詩、まことにありがたき事にこそ。

門賓拾謁宜期夏、閨婦孤夢還嫉春

故郷有母秋風淚、旅館無人暮雨魂

これらぞ、詩にはわづかにえ侍る。まことにありがたき事とぞ見え侍る。か様に申せば、詩をさへしれる様にかたはらいたく侍れども、承りおきし一節を申し侍る也。或人の詩と歌とを堅固によせあはずまじき様に申したる、それは僻事にや。詩を模してよめる歌と心得べし。すべて不可相違也。

をわきまふべきにや。代々撰集をよく見、かくして撰集の勝劣、撰者の甲乙、作者等の堪・不堪、心をとどめて思案せよとなり。大江以言がつくれる詩、「花時家不居」と云題にて、

門賓拾謁宜期夏、閨婦孤夢還妬春

故郷有母秋風淚、旅館無人暮雨魂

これらぞ、詩にはこひねがふべきたぐひと申侍るべき。「暮雨魂」の詩は為憲が作也。此二首は、初詩題の心をよくとりよせて、風情の優美ならびなしとおぼゆる。後の詩は、其心詞たけありて、しかもめづらか也。はるかにまされる秀逸也。或人、詩と哥とは堅固あらぬ物の様に申たる、それは誠に僻案なるべし。凡詩と申は、からの哥と申にや。

この箇所に関しては、単なる類似ではなく、本文の参照・被参照の関係を想定して問題無いだろう。冒頭箇所などは二巻本の方が『愚見抄』に近い。ただし、二重傍線部のみではあるが、一巻本の方が二巻本よりも『愚見抄』に近い形になっており、注意される。

③実朝評

(愚見抄)

さて、鎌倉右府の哥さま、おそらくは人丸・赤人をもはぢがたく、当世不相応の達者とぞ覚侍。

ものゝふのやなみつくるふこての上にあられ玉ちるなすのしの原

はこねちをわがこえくれればいづの海やおきのこしまに浪のよるみゆ

これらはわざとめかてたしなまぬ所成べし。万葉集の中に書まじへたりとも、よもはばからじ。彼右府の哥勢をみるにぞ、道も物うく心も屈するやうに覚侍る。此おもむきは、不器のまへには、ことに恐べきさま也。

(一巻本)

此頃古き達者にも及び、今の好士にも越えて侍るやらん、鎌倉右大臣公の詠作は、まことに凡慮の及ぶべきさかひにもあらざるかと、ゆゆしくぞ覚え侍る。柿本、山辺の再誕とは是をや申すべく侍らん。

(二巻本)

又、鎌倉右府ぞ、たけたる哥人と覚え侍る。古人の詠作にまじへたり共、すべておとるべからず。ことにならびなき事とぞ覚え侍る。彼詠作を見侍る時ぞ退屈の心もいできて物うく侍る。更になふべくも侍らぬ風骨なり。

はこね路を我こえくれはいづの海や奥のこし

まに波のよるみゆ

篠の葉にあられさやきてみ山辺は峯の木がら

ししきくふきぬ

是にて侍り。

この箇所に関しては、引用歌を見る限り、二巻本の方が『愚見抄』本文に近いと言えよう。⁽¹²⁾ ただし、明かな借用関係とまでは言えない。

猶、二巻本の「退屈の心もいできて物うく侍る」という本文は『愚見抄』の「道も物うく心も屈する」に対応するものと思われる。そのままの引用という訳ではないが、この記述には『愚見抄』を参照していると考えて良いだろう。

④清輔・亡父卿

(愚見抄)

愚意ひそかに通じて、哥さまの無上とみえて、しかも本にひかるべきは、清輔・亡父卿の哥にて侍べし。これは、いにしへをかね、いまの世にもかなふべき也。彼人々の哥をかきあつめて、其あちはひをなめよ。

(一巻本)

幽玄体をかねて有心体を学ばん人は、清輔朝臣・亡父卿などの詠歌によみにせんとすべし。それはよもあしからじとぞおぼえ侍る。

(二巻本)

つら／＼思ふに、まなぶべき人の哥さまは、清輔・其父卿などにて侍るべし。其姿昔今に通してよろしき体なり。幽玄をさきとして、しかも有心体を存ぜり。是によみにせんと相構々たしなみまなぶべし。それはよもあしからじと覚え侍る。

この箇所に関しては、明確な本文的影響関係は見えない。強いて言えば二巻本が「歌さま」というこの箇所に関しては、二重傍線部の語彙が共通する二巻本の方が『愚見抄』本文に近いとは言える。ただし本文の一致率は高くなく、

明確な影響関係は指摘出来ない。

*

以上からも前節で想定した二点は追認できそうである。

『愚秘抄』生成に『愚見抄』が全く無関係ということは考えるには、影響関係を想定可能な部分が多すぎる。その一方で『愚見抄』を「粉本」とするには、本文の一致度が低すぎる。少なくとも、『愚秘抄』原撰本の製作時に、『愚見抄』が座右におかれていた、という可能性は低そうである。そもそも『愚秘抄』は『愚見抄』よりもかなり分量が多く、『愚見抄』と重なる部分は一部に過ぎない。『愚見抄』の影響は過大評価しすぎではあるまいか。『三五記 上』の影響と思しき箇所が見られたことを考慮すれば、『愚見抄』はじめ、『三五記 上』『桐火桶』など冷泉家で作られたと考えられる鶉鷺系歌字書をよく読んだ人物(あるいは集団)によって撰述された、とみるのが難が無さそうである。位置づけとしては、「重要な参考資料のひとつ」くらいのものだろう。

問題は一卷本先行説である。一卷本よりも二巻本の方が『愚見抄』に近い。「粉本」とまでは言えないにせよ、『愚見抄』の影響下に作られた書であるならば、二巻本の方が一卷本に先行するものと考えたくなる場所である。ところが、②波線部のように、一卷本の方が『愚見抄』に近い本文を有するケースもあり、両者の先後関係は確定困難である。そもそも一見して分かる通り、両者の本文異同はあまりにも大きく、一卷本を増補して二巻本が成った、あるいは二巻本を抄出して一卷本が生まれた、いずれの考え方をとるにせよ、文言が変わりすぎているように思われる。また、本文は完全に別文である場合が多いが、原則として主旨はほぼ変わらない。これをどう考えたら良いか。

ここで思い起こされるのが、手崎政男氏が板本と類従本の比較から出した、「互いに異本的関係に立つのではなくして、原本的関係にあるもの」という考え方である。ともに二巻本に属する板本と類従本との関係において、このよう

なことが言えるかは別途検討が必要であるが、少なくとも原撰一巻本と原撰二巻本については、同一主体によって別個に製作された、「原本的關係にあるもの」、つまり同一テキストの異本関係にあるものではなく、互いに別個に撰述されたテキストと考えるのが、現象を無理なく説明できるのではないだろうか。⁽¹³⁾

以上が、本稿の考察のいちおうの結論である。今後、諸本整理の進展によりこの結論について補足・修正を加えてゆくことにより、『愚秘抄』諸本の様態について明かにしてゆきたい。

〔注〕

(1) 北島親房『古今集序註』に、鶉鷲の書に関わる伝承が見えることが知られている。これは二条家サイドの視点で語られたものであるが、冷泉家側の立場で語られた伝承も『古今和歌集聞書「冷泉流」』に見える（拙稿「冷泉流を標榜する古今注―『古今和歌集聞書「冷泉流」』をめぐる―」（人間文化研究機構国文学研究資料館編『中世古今和歌集注釈の世界―毘沙門堂本古今集注をひもとく』、勉誠出版、二〇一八）、（翻刻）『古今和歌集聞書「冷泉流」』（『調査研究報告』39、二〇一九）参照）。このような伝承に基づき、諸書が生成・展開したものとと思われる。

(2) 『愚見抄』諸本については、國米秀明氏「龍谷大学図書館蔵『愚見抄』について」（『中世文芸論稿』11、一九八八）、吉原克幸氏『『愚見抄』研究―その伝本と龍谷大学蔵本の研究』（『中世文芸論稿』12、一九八九）、酒井茂幸氏『『愚見抄』伝本考』（『禁裏本と和歌御会』、新典社、二〇一四）参照。『桐火桶』諸本については、佐藤恒雄氏「解説」（徳川黎明会叢書『和歌編四 桐火桶・詠歌一体・綺語抄』思文閣出版、一九八九）、及び本稿所掲の島津氏論文参照。

(3) 鶉鷺系歌学書に関する未解明の問題は多いが、本稿では煩瑣を避けて『愚秘抄』の諸本に関する問題のみを扱う。

(4) 本稿で言及する諸論のほか、石田吉貞氏『藤原定家の研究』(文雅堂、一九五七)、佐佐木忠慧氏『中世歌論とその周辺』(おうふう、一九八四)など。

(5) 手崎氏の掲げた番号でいうところの、④⑥⑧⑪⑱⑳あたりは、影響関係にある可能性が高そうである。

(6) まだ十分な調査を実施した訳ではないが、一定の調査を行った限りでは、やはり三輪氏の四分類は、分類基準としてある程度は有効なものと考えられる。今後はこの四分類を補助線として活用し、諸本の整理を行いたい。

(7) 場合によっては先に出した結論が覆るという場合もあるだろうが、それはその都度修正することで、研究を進展し得るものと考ええる。

(8) 勿論、「一巻本／二巻本」という分類基準の適切さを別途考察しなければならないが、確認のしやすいテキストをみる限りでも、一巻本に属する歌学大系本と二巻本に属するとされる冷泉家本・群書類従本・版本に本文異同の著しいことは間違いない。

(9) 『愚見抄』の伝本の中には、引用部「行雲廻雪体・理世撫民体」を「行雲体・廻雪体・理世体・撫民体」(歌学大系本など)をするものもある。

(10) 『三五記 上』の該当部本文は以下の通り、

理世・撫民の至極体は、大旨は有心体の中の本姿なり。同じ有心体と申しながらまことしくありのまゝに、
げにさること覚ゆるやうに、心を深くよみすゑたらむ類を、理世・撫民等の体とすべし。まことしから
ぬ事と様かう様に心深き様に読みたりとも、それをば有心体に接して、理世等の歌とは申すべからず。

有心体にもあまたの品侍るべし。例へば異域の堯舜、当朝の延喜天曆などを無比の賢王と申すが如く、歌の体にも、理世・撫民の体をもて無上の至極とすべし。

(11) 第二節で言及した手崎氏論は、二巻本である群書類従本と『愚見抄』との本文比較を行っているが、田中氏が提示した箇所以外にも類似の箇所が掲げられている。その点からみても、二巻本の方が『愚見抄』に近いのは明らかであるように思われる。

(12) 冷泉家本と同系統である群書類従本には「はこね路を」歌と「篠の葉に」歌の間に、『愚見抄』に引かれる「武士の」歌が存する。

(13) これはあくまで原撰段階における想定であり、現存諸本の本文が、その後の本文発展段階における付加を有する可能性は否定できない。これは別途検討を要する課題である。また本稿では言及する余裕がなかったが、諸氏の論で言及されるように、諸本における基俊と俊頼の扱いの差異は、諸本生成の過程を考える上で重要な問題である。これも別途検討する必要がある。

【付記】本文の引用に当たっては一部表記を改めた場合がある。また小字はへんで示した。猶、本稿は「JRS」科研費 JP18K12305 の助成による研究成果の一部を含むものである。

The problems in the study of the variant texts of *Guhisho*.

TATENO Fumiaki

Among the group of waka-poetics called "*Usagi-series*" (*Gukensho*, *Sangoki*, *Guhisho*, *Kirihioke*), the book that remains the most important subject to be examined is *Guhisho*. As for the problems of the books, there is a common phylogenetic classification, but there are various problems. In this paper, we first introduced the previous researches on the variant texts of *Guhisho*, and examined the current problems of the studies of *Guhisho*. As a result, it was clarified that the phylogenetic classification that is generally performed now is recognized as a common theory without sufficient verification. The work required hereafter will be to re-arrange the variant texts of *Guhisho* and re-examine the validity of the conventional theory.

Next, as the first step of the verification, we revalidated the details of the theory that *Guhisho* is based on *Gukensho* and that *Ikkonbon* had been established earlier than *Nikanbon*, which has become the general theory of the current *Guhisho* research without verification. As a result, it was shown that *Gukensho* should be considered as "one of the important reference materials" rather than "basis". In addition, it has been assumed that original-*Ikkonbon* and original-*Nikanbon* are separately produced books by the same subject.